

## 総説

## 我が国の「院内看護研究」に関する研究の動向と今後の課題

浅井美穂<sup>1)</sup> 山勢博彰<sup>2)</sup><sup>1)</sup> 宇部フロンティア大学人間健康学部看護学科<sup>2)</sup> 山口大学大学院医学系研究科

キーワード ; 院内看護研究, 看護継続教育, 院内教育, 文献検討

## I. はじめに

看護職養成教育機関を卒業した卒業生の多くが、就職したのち最初に与えられる研究の機会として最も一般的なものは、「院内看護研究」である<sup>1)</sup>。現在、数多くの病院で取り組まれている院内看護研究は、看護継続教育の一環として行われている研究活動であり、看護部院内教育に位置づけられている<sup>2)</sup>。院内看護研究において、看護師は各部署や各病棟単位で研究グループを結成し研究に取り組むことが多く、その成果は「院内看護研究発表会」等の機会を通して発表され、院内看護研究抄録集などに掲載される。

院内看護研究における研究テーマは、各部署・各病棟単位でのTQM (Total Quality Management) 活動で行われている様な日常での身近な問題を取り上げたテーマや、業務改善に直結した視点から研究に発展させたものなど様々である<sup>3)</sup>。この中で発表された幾つかの研究においては、のちに各種の学会誌に投稿され、我が国の看護の発展において大きな一助を担っていくものとなる。

現在、我が国の看護教育制度に準ずる看護職養成教育機関において、看護基礎教育カリキュラムの中で「看護研究」について教授することの重要性が認識され、定着されつつある<sup>4)</sup>。しかし一方で、我が国の看護職養成教育機関については、大学・短期大学・専修学校(専門課程)を始め、これらに分類されていないその他の学校まで存在し、看護基礎教育制度そのものは極めて複雑化している。そのため、各教育機関における「看護研究」について、確立された教育カリキュラムは未だ存在しておらず、その教授内容についても各種の看護職養成教育機関によって大きく異なっているという現状がある<sup>5)</sup>。

この様我が国では、看護基礎教育の中で「看護研究」について異なる看護職養成教育機関で教授を受け

た者が、看護継続教育の中では同じ看護部院内教育の一環として「院内看護研究」に取り組むというケースが少なからず発生する。その場合、研究グループの構成メンバーによって、研究活動における基礎的な知識だけでなく、研究に対する感情や取り組みの姿勢などにおいて、それぞれの認識に差異が生じることが推測される。

看護部院内教育は、病院の条件や、構成する看護師の経験などによってニードが異なるものであり<sup>6)</sup>、看護継続教育において、組織的・系統的な院内教育の策定を図ろうとする際、このことは重要な問題となる。看護研究に対し異なる認識を持ちながら同じ教育プログラムの中で院内看護研究に取り組む場合、その教育効果には個人差が生じ、院内教育の目的達成を困難とさせる要因となるばかりでなく、看護研究活動そのものに対する負の感情を生じさせる恐れもあり<sup>7)</sup>、看護における研究活動の発展に、何らかの影響を及ぼすことが懸念される。

今後、多くの医療機関において、看護継続教育の一環としてより効果的な院内看護研究プログラムを確立させていくために、これまでの院内看護研究の現状を整理し、明らかにされていること、今後の課題として取り組むべき方向性を見極める必要がある。またその際、看護基礎教育カリキュラムの中での「看護研究」の現状についても考慮することで、看護継続教育における院内看護研究の体系化に向けて、より促進された方向性を見出す一助になると考える。

そこで本研究では、看護基礎教育と看護継続教育に連動した看護研究教育カリキュラムの在り方を起案するための第一段階として、まず、我が国における院内看護研究に関する先行研究のレビューを通して、院内看護研究についての動向と今後の課題を明らかにすることとした。

## II. 方法

1990年から2011年までの国内における院内看護研究に関する研究を、文献検索システム医学中央雑誌Webを用いて検索した。

検索対象年設定理由については、次のとおりである。1951年に保健師助産師看護師法が制定されたのち<sup>8)</sup>、保健師助産師看護師学校養成所指定規則は大きく5回(1951年、1968年、1989年、1996年、2008年)の改正が行われている<sup>9)</sup>。特に1989年の改正において、看護基礎教育内容に「基礎科目」「専門基礎科目」「専門科目」が設置され、教育内容においても「実習」と比較し「講義」により時間数を費やすカリキュラムに変化した。そして、特に大学における看護基礎教育の中では「看護研究」を教授することの必要性について盛んに提唱され始めた<sup>10)</sup>。その様な背景をふまえ、1990年代より近年にかけてのおよそ20年の間に、院内看護研究に関する研究の動向に何らかの変化がある可能性が考えられたため、1990年以降の21年間の文献を対象とすることとした。

対象とした文献種別は、原著論文、解説、総説、図説とした。

検索方法は、「看護研究」をシソーラス用語とし、「院内看護研究」「看護継続教育」「看護生涯教育」のキーワードを組み合わせてAND検索を行った。なお、「院内看護研究抄録集」として検索された文献については、本領域とは異なる性質があり、その内容の背景が本研究と直接的な関連がないと判断したため除外した。

分析は、文献数の推移および研究内容別割合から全体的な院内看護研究に関する研究の動向を確認した後、院内看護研究に関する研究の取り組みの現状について、研究成果を明らかにした。

## III. 結果

### 1. 院内看護研究に関する研究の現状

74件の文献を抽出した。

#### 1) 文献数の推移

1990年からの21年間における文献数の推移を図1に示した。年平均文献数は、3.57件であった。

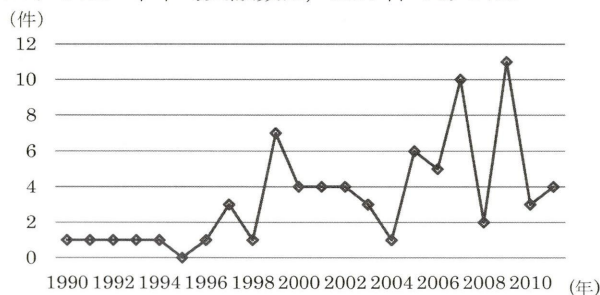


図1 我が国の「院内看護研究に」に関する研究の文献数の推移

### 2) 研究デザイン

研究デザイン別割合を図2に示した。質問紙法を用いた実態調査研究が27件(36.5%)と最も多く、次いで解説が16件(21.6%)、文献研究が11件(14.7%)と多かった。比較記述研究は6件(8.1%)であり、インタビューによる質的帰納的研究が4件(5.4%)と最も少なかった。

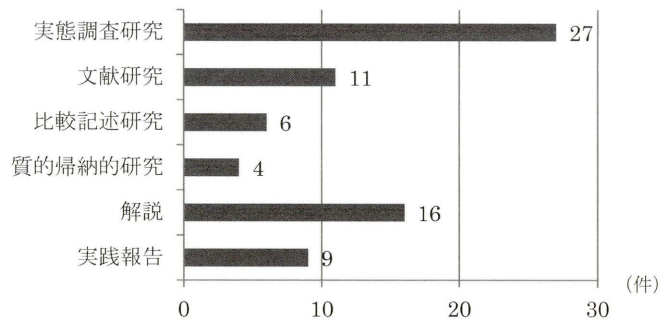


図2 研究デザイン別割合 (n=74, 重複あり)

### 3) 文献内容

文献内容別割合を表1に示した。

内容では、院内看護研究の支援体制に関するものが31件(30.0%)と最も多く、次いで研究者である看護師の意識に関するものが26件(28.0%)、院内看護研究の内容についての分析に関するものが23件(24.7%)であった。その他、院内看護研究活動の現状報告、対象者への倫理的配慮に関するものなどであった。

表1 対象文献の内容別割合 (n=74, 重複あり)

項目	文献数	
院内看護研究の支援体制	研究環境の整備	17
	研究指導方法の検討	21
	職場上司の支援	9
研究者である看護師の意識	取り組みによる意識の変化	16
	研究意欲の要因となるもの	10
院内看護研究の内容分析	研究内容の動向	11
	研究の活用	12
その他	院内研究の現状報告	4
	倫理に関する検討など	1

### 2. 院内看護研究の支援体制

院内看護研究の支援体制に関する文献31件をレビューした結果、研究成果は1)研究環境の整備、2)研究指導方法の検討、3)職場上司の支援の3つに分類できた。

#### 1) 研究環境の整備

研究環境の整備については、看護師の継続学習の支援という視点での現状報告や、院内看護研究における支援体制方法の検討、院内看護研究者の学びと支援状況の実態などの報告がなされていた。

加藤ら<sup>11)</sup>は、院内看護研究支援の充実において、研究に必要な文献、パソコンなどの整備と、研究への知識を備えた院内の人材育成を行い、研究を行う看護師がいつでも相談できる環境を整えていく必要があると報告した。設備環境について竹原ら<sup>12)</sup>の研究では、研究過程の困難性が高かったのは、論文作成、研究時間、文献検索であり、経験年数3年以下は研究費用・文献検索に困難を感じ、4年以上は論文作成に困難を感じていたと報告された。

以上の報告より、院内看護研究を支援する際には、パソコンやインターネット環境、必要な文献の提供、費用の提供など、まず基本的なハード面での環境整備と、適切な人材や研究に費やす時間などのソフト面の両面の充実が必要であることが明らかになった。

## 2) 研究指導方法の検討

研究指導方法については、外部講師による指導の導入の必要性、指導の内容、外部講師による支援環境を整備する際の課題について言及している文献が多く見られた。

院内看護研究の経年的推移と年代別取り組み状況について、小野<sup>13)</sup>の報告では、外部講師による指導を導入した年度より研究発表数の増加が見られていた。また、松川ら<sup>14)</sup>は、大学講師の研究指導が入っている施設と入っていない施設の2群の比較検討をしており、大学講師の指導が入っている群は、入っていない群に比べて「研究活動に満足している」と回答した人の割合が有意に高く、「研究活動は満足することが多い」と回答した割合が有意に低かったと報告している。一方、外部講師の研究指導を困難にしている要因として、竹山ら<sup>15)</sup>は、外部講師との日程の調整が困難であることを報告している。

研究活動において、研究指導を必要としている項目については、狩野<sup>16)</sup>らの報告がある。その報告では、外部講師からの指導を必要としている項目について、研究目的の明確化や、データ解析・分析方法などが挙げられている。これらについては、院内看護研究経験者の研究計画書作成困難度と関連する要因について調べた長船<sup>17)</sup>の研究においても、同様の報告がなされている。

研究指導の効果について、川崎ら<sup>18)</sup>の研究によると、研究の理解度の高さと研究への参加度の高さに有意な相関が認められ、研究指導は研究参加者の研究意欲の向上に、より効果的な影響を与えたことが示されている。

以上の報告より、院内看護研究の支援体制を策定するに当たっては、大学教員などの外部講師の専門的な指導を取り入れることで、研究活動に有意義な効果をもたらすことが出来、研究者の意欲の向上にもつなが

ることが明らかになった。また、研究者が指導を必要としている内容は、研究計画書作成のプロセスやデータ分析など、看護に関する知識そのものについてではなく、研究活動を遂行する為のより専門的な能力を必要とする項目のニーズが高い。研究者は外部講師に指導を受けたいというニーズを持っているが、外部講師との日程の調整などで困難な状況が発生し、研究活動の遂行に影響を与えているということが分かった。

## 3) 職場上司の支援

職場上司の支援について、渡邊ら<sup>19)</sup>により、師長・主任が看護研究研修会に参加することの意義について述べられている。研究によると、師長・主任が研修会に参加する前後で、院内看護研究で発表された論文のクリティークを行った結果、スコア評価の増加が見られたという報告がある。職場上司の支援方法については、研究者の物理的・精神的サポートとして、研究時間の確保、業務の調整、研究者に対する労いや、困難にぶつかったときの上司の助言・指導の必要性などについて、竹原ら<sup>20)</sup>や美馬<sup>21)</sup>の研究で報告されている。

以上の報告から、院内看護研究活動の円滑な遂行に当たっては、研究者だけでなく、研究者を支援する師長や主任など、身近な上司の研究に対する十分な理解と適切な指導、また必要時には看護業務の調整などが必要とされていることが明らかになった。

## 3. 研究者である看護師の意識

院内看護研究において、研究者である看護師の意識に関する文献26件をレビューした結果、研究成果は、

- 1) 院内看護研究に取り組むことによる意識の変化、
- 2) 研究意欲の低下の要因となるものの2つに分類できた。

### 1) 院内看護研究に取り組むことによる意識の変化

院内看護研究に取り組むことによる意識の変化について、鈴木ら<sup>22)</sup>は、看護研究経験者の看護研究に対する意識をカテゴリー化し分析している。研究によると、「評価」「価値」「意義」について肯定的な意識を感じていた。また、竹山ら<sup>23)</sup>は研究者にインタビュー調査を行っており、研究を促進していた要因には「指導・協力の充実」「研究意義の明確化」「達成感」などの項目が挙げられている。看護師の研究意欲については、樋口<sup>24)</sup>らや富山ら<sup>25)</sup>の研究で報告されており、研究は仕事のやりがいにつながり、さらに質の高いケアへの探求につながっていることが明らかになっている。また、「研究はおもしろい」と感じる意識に研究の継続が関連していることや、研究の理解度と研究意欲の向上に有意な関連があること、院内看護研究への参加が自己教育に影響を与えていることなどが高橋<sup>26)</sup>により報告されている。

## 2) 研究意欲の低下の要因となるもの

研究意欲の低下の要因となるものについても、種々の報告がなされている。久保ら<sup>27)</sup>は4年生看護大学卒看護師の臨床看護研究における体験についてインタビュー調査をし、6つのカテゴリーを抽出している。カテゴリーの中で否定的な感情として、「曖昧なまま進むことへの苛立ち」「じっくり文献を検討できない不安全感」「自分のペースで進められないジレンマ」「脇役での役目の中途半端さ」「自分の研究能力の自信のなさ」が挙げられている。また、堀江ら<sup>28)</sup>は、研究後期のプロセスで外部講師との調整に悩んでいることや、データ分析の困難さを挙げている。また、佐藤<sup>28)</sup>の研究によると、臨床看護系職員にとっての院内研究の意味について、「院内研究は仕事だ」と表すことで統合されたとしており、正岡<sup>29)</sup>は、看護研究について「やらされ感」は研究活動にマイナスの影響を与えると述べている。研究に対する今日的課題として、戸井田ら<sup>30)</sup>によると、看護研究が形骸化している状況下での研究活動は苦行であり、出来ればやりたくないという看護師の意識を生むとしている。

以上の報告より、看護師は院内看護研究に取り組むことで、研究活動の意義や看護における価値を見出していることが明らかになった。また、疑問を理解することで達成感を感じ、看護活動に対するより一層の探求や自己教育の機会となり、研究に対する意識に変化をもたらすことが分かった。しかし、院内看護研究活動を遂行していこうとする際に、研究の困難さや適切な指導を受けられないこと、研究をチームで遂行することの難しさや「やらされ感」などの障害にぶつかり研究意欲が低下することや、自己の認識と他者との調整に苦悩している現状も見えた。そして、形骸化した研究は研究意欲を低下させる要因となることが分かった。

## 4. 院内看護研究の内容についての分析

院内看護研究の内容分析については、1) 研究内容の動向、2) 研究の活用の2つに分類できた。

### 1) 研究内容の動向

研究内容の動向については、院内看護研究発表会収録集に記載された研究の投稿数の増加の推移や、研究内容の分類を行っている坂上ら<sup>31)</sup>の研究が報告されている。また、研究の対象者と研究テーマに着目した坂口<sup>32)</sup>らの研究や、研究指導を導入してからの研究の質や対象者への倫理的配慮の変化を明らかにした平ら<sup>33)</sup>の研究も報告されている。

研究テーマの視点について、院内看護研究の過去10年間の分析を行っている中川ら<sup>34)</sup>の研究では、研究の内容は、臨床現場での身近な問題に関するものが多く、経済的視点や医療連携に関する研究は少なかったとの

報告がある。

## 2) 院内看護研究の活用

原田ら<sup>35)</sup>は、看護師が現場で行っている看護研究に限定し、現場での活用に影響する要因分析を行っている。「活用している」看護研究は、「スタッフの全体に変化があること」「スタッフ全体に変化が期待できる」「新たなツール導入効果の検証」であった。「活用していない」看護研究は、「活用には検討が必要」「記憶から消えている」「実態調査」であった。

院内看護研究の活用については、研究成果活用の推進に関する鈴木<sup>36)</sup>の文献や、院内看護研究の活かし方について、個人の成長と成長を育む職場づくりにつなげることを推奨している岡田<sup>37)</sup>の文献がある。

以上の報告より、近年、院内看護研究に取り組む施設が増加しており、その研究内容の動向についても分析が進んできていること、研究の増加に伴い研究の質や倫理的配慮についても変化してきていることが確認された。また、院内看護研究における研究テーマは身近な問題を取り上げていることが多く、看護部ではその研究成果の活用が積極的に求められている為、研究成果の活用の推進についても大きな関心の一つとなっていることが明らかになった。

## IV. 考察

### 1. 院内看護研究に関する研究の現状

本研究では、院内看護研究に関する研究の文献数は増加傾向にあり、2000年代に入る頃特に増加していることが明らかになった。1996年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則改正に伴い、看護大学での看護基礎教育は、分野別の思考から統合的カリキュラム型の思考に変化した。そして、4年生大学卒業者に期待される役割について、看護学教育に関する基準<sup>38)</sup>の中で、21世紀の看護学教育についての提唱が盛んに行われていたのが2000年頃である。その変遷期に看護職養成教育機関を卒業した卒業生の多くが就職し、院内看護研究に携わる様になったこと、看護継続教育についての変化などもあり、近年ますます院内看護研究が関心の高いテーマとなることが考えられる。

研究デザイン別割合でみると、実態調査研究と解説が全体の約6割を占めている現状も明らかになった。今後は、研究内容や研究デザインについて、より多角的な視点からの研究の蓄積が必要であると考えられる。

### 2. 院内看護研究の支援体制

本研究では、院内看護研究の支援体制について、ハード面とソフト面の両面での環境整備の必要性が確認できた。また、外部講師のより専門的な指導の有効性、職場上司の看護研究に対する理解と調整が、研究活動

に影響していることが確認できた。

研究者である看護師の研究意欲を低下させる要因の中でも、研究計画書の進め方や、データの解釈・分析に困難を感じている研究者が多く存在していた。データの解釈・分析は、統計学的な専門知識を必要とする為、看護職養成教育機関によっては、看護基礎教育カリキュラムの中で十分な教授を受けていない場合もある。そのような研究者にとって、統計学の基礎から理解しないといけないことは大きな障害である。日々の看護業務をこなしながら院内看護研究に取り組んでいる臨床看護師にとって、専門分野外の知識を学ぶことは、大変な努力と時間を必要とするものだと考える。研究指導に当たる外部講師においては、このような研究者の状況を理解したうえで、研究者の指導に対するニーズと研究能力を適切に評価し、指導内容の決定や、評価・修正を行っていく必要があると考える。

一方で、外部指導者もまた十分な指導の時間を確保することが困難な状況にあり、先行研究の中でも研究意欲を低下させる要因として、外部指導者との調整の困難さが挙げられていた。日々の業務と並行して研究活動を行う臨床看護師が外部指導を受けられる時間にも限界がある。科学的な根拠に基づいた看護実践が叫ばれている今日、科学的知識体系を発展させることは今後の看護界の発展にとって重要な問題である。このような現状からも、院内教育の充実を考える際、看護基礎教育の中での「看護研究」に関する確立されたカリキュラムの在り方についての検討と、看護基礎教育と看護継続教育の連携について提起していくことが、今後の課題の一つであると考えられる。

### 3. 研究者である看護師の意識

本研究で、研究者は時に研究意欲を低下させる様な困難にぶつかりながらも研究に取り組んでいることが分かった。そして、最終的には研究活動の意義や看護における価値を見出し、疑問を理解することで達成感を感じ、看護活動に対するより一層の探求や自己教育の機会としていた。先行研究で述べられていたように、院内研究に取り組んでいる最中は様々な苦悩があるが、職場上司にあたる師長や主任は、その様な研究者の現状を把握し、研究者が研究を遂行しやすい支援体制について考慮する必要があると考える。インターネット環境や十分な文献の提供、又はそれらに関する情報の提示、場合によっては業務の調整を行い、適切な研究時間を確保できるよう配慮することも必要である。また、上司の労いや助言は研究意欲の向上につながる為、上司がその様な病棟の雰囲気づくりについて検討することは、研究活動の活性化に有効であると考えられる。

また、外部指導者との調整に困難を感じている研究者にとって、研究に関する些細な疑問に対し、上司から助言を受けることが出来ることは、問題の早期解決と円滑な研究活動の遂行に有効と考える。職場上司に当たる師長・主任においては、積極的に看護研究に関する研修会などに参加し、自身の研究能力の向上についても研鑽していくことで、研究者への支援体制がより良いものになっていくと考える。

### 4. 院内看護研究の内容についての分析

院内看護研究の内容について、研究テーマは身近な問題を取り上げていることが多く、その研究成果の活用が積極的に求められていることが明らかになった。研究成果が日々の業務の改善に早急につながることは、職場環境の改善にもなり、研究の成果を研究者自身が自らの体験を通して感じる事が出来るため、研究者自身の達成感や喜びに直結しやすいのではないかと考える。

しかし、看護における研究は、必ずしも短期間で成果が現象として現れるものばかりではない。ある程度の年月をかけて研究に取り組むことで、大きな成果を生み出し、我が国の看護の発展において大きな一助を担っていくものもまた、数多く存在する。

現在、多くの病院で行われている院内看護研究の多くは輪番制であり、継続研究が必要な問題について十分な継続が出来ない場合や、毎年新たなテーマで取り組むことが重要視され、「研究の芽」のまま育っていないテーマが多く存在している可能性がある。今後、院内看護研究の教育カリキュラムを検討する際には、研究者の研究に対する動機や意欲、研究活動を継続していく能力などを評価し、それぞれの研究者に適した方法での研究活動が行えるような体制を整備していく必要があるのではないかと考える。

### 5. まとめ

本研究では、これまでの院内看護研究の現状を整理し、今まで明らかにされていること、今後の課題として取り組むべき方向性を明らかにすることを目的として、先行研究のレビューを行った。その結果、院内看護研究に関する研究は増加傾向にあり、近年関心の高いテーマであることがうかがえた。今後の課題としては、これまで明らかにされている院内看護研究の支援体制、研究者の意識、院内看護研究内容の分析について、看護基礎教育と看護継続教育の連動などの多角的な視点もふまえながら検討することで、看護部院内教育での院内看護研究のさらなる質の向上につなげること、また、今後も研究の蓄積を行い、看護学教育に於ける看護研究の教育基準を明確にしていくことである。

引用文献

- 1) 久保和子他：4年制看護大学卒看護師の臨床看護研究における体験，日本看護学会論文集：看護管理(1347-8184) 40号，183-185，2010.
- 2) 鈴木美和：看護基礎・継続教育による研究成果活用の推進 院内看護研究指導を通しての研究成果活用の推進，看護教育学研究，(0917-6314) 18巻2号，22-23，2009.
- 3) 中川いみ子他：院内看護研究の推移と臨床への活用状況の分析 過去10年間をふり返って，日本看護学会論文集看護管理(1347-8184)36，175-177，2006.
- 4) 杉村みど里：舟島なをみ，看護教育学第4版増補版，2009，医学書院.
- 5) 前掲載文4).
- 6) 舟島なおみ：院内教育プログラムの立案・実施・評価 「日本型看護職者キャリア・ディベロップメント支援システム」の活用，2007，医学書院.
- 7) 佐藤節子：介護強化型病院に勤務する看護系職員にとつての研究活動の意味，東海大学健康科学部紀要5，63-68，1999.
- 8) 保健師助産師看護師法  
<http://www.houko.com/00/01/S23/203.HTM>
- 9) 看護教育の改革，日本看護協会  
[www.nurse.or.jp/home/kisokyouiku/](http://www.nurse.or.jp/home/kisokyouiku/)
- 10) 前掲載文9).
- 11) 加藤重紀江他：院内看護研究における支援体制方法の検討，仙台市立病院医学雑誌(0388-8878) 31巻，87-92，2011.
- 12) 竹原和子他：院内看護研究者の学びと支援状況の実態，広島県立病院医誌(0387-6454) 34巻1号，155-158，2002.
- 13) 小野千代子：院内看護研究の経年的推移と年代別取り組み状況 過去5年間のふりかえり，日本看護学会論文集看護管理(1347-8184) 39，202-204，2009.
- 14) 松川美鶴：中小規模病院看護職の外部支援体制の有無による院内看護研究活動の比較，日本看護学会論文集：看護管理(1347-8184) 39，196-198，2009.
- 15) 竹山洋恵他：院内看護研究に関する実態調査，日本看護学会論文集：看護総合(1347-815X) 38，463-465，2007.
- 16) 狩野京子他：院内看護研究支援体制の現状と課題，島根県立中央病院医学雑誌(0289-5455) 30巻，91-96，(2006.08).
- 17) 長船晶子：院内看護研究経験者の研究計画書作成困難度と関連する要因，日本看護学会論文集：看護管理(1347-8184) 35号，18-20，(2005.03).
- 18) 川崎久子他：院内看護研究の研修方法とその効果 院内指導者による指導体制の試み，日本看護学会論文集看護管理(1347-8184) 34，236-238，(2004.03).
- 19) 渡邊美智子他：大学病院における師長・主任を対象とした看護研究研修会の効果 実施前後の意識変化とクリティーク表からの論文評価，日本看護学会論文集：看護管理(1347-8184) 39号，264-266，(2009.04).
- 20) 竹原和子：院内看護研究者の学びと支援状況の実態，広島県立病院医誌(0387-6454) 34巻1号，155-158，(2002.12).
- 21) 美馬敦美：看護研究に関する管理者からみた活用状況 徳島県立中央病院医学雑誌(0913-5103) 26巻，49-52，(2005.03).
- 22) 鈴木久子他：A病院の看護研究に対する意識 看護研究経験者へのアンケート調査，日本看護学会論文集：看護教育(1347-8265) 41号，342-345，(2011.02).
- 23) 前掲載文15).
- 24) 樋口夏美他：研究意欲を育む研究支援体制とその評価，日本看護学会論文集：看護管理(1347-8184) 36号，181-183，(2006.03).
- 25) 富山清江：看護研究活動支援に対する評価 「研究はおもしろい」と感じる環境づくり，日本看護学会論文集：看護管理(1347-8184) 35号，256-258，(2005.03).
- 26) 高橋茂子：院内看護研究が看護婦の自己教育に与える影響 研究者と研究委員との共同の研究計画書の合議を導入して，交通医学(0022-5274) 54巻，3~4，105，(2000.07).
- 27) 前掲載文1).
- 28) 堀江玲子他：院内看護研究における看護研究委員の研究支援プロセス，日本看護学会論文集：看護教育(1347-8265) 39号，36-38(2009.02).
- 29) 正岡洋子：「やらされ感」を解消する院内看護研究支援策 スタッフが行ってほしい支援体制のあり方と看護研究委員会活動の取り組み，ナースマネジャー8巻12号，33-43，(2007.03).
- 30) 戸井田ひとみ他：看護研究にみられる今日的課題，日本看護学会論文集：看護管理(1347-8184) 36号，172-174，(2006.03).
- 31) 坂上節子他：院内看護研究の動向 20年間の看護研究の内容分類と歴史，市立三沢病院医誌(0917-2521) 15巻1号，25-27，(2007.06).
- 32) 坂口桂子他：看護研究13年間のまとめ 看護研究発表会抄録集からの動向京都市立病院紀要(0286-1356) 30巻1号，39-42，(2010.09).
- 33) 平葉子他：看護研究における倫理チェックリスト運用の有用性 導入前後の院内看護研究集録の比較調査から，日本看護学会論文集：看護管理(1347-8184) 33号，248-250，(2003.03).
- 34) 前掲載文3).
- 35) 原田雅子他：臨床看護研究の活用に影響する諸要因の

- 分析 研究種類の分類と活用に関する意識調査を用いて広島県立病院医誌(0387-6454) 41巻1号, 95-101, (2009.12).
- 36) 鈴木美和: 看護基礎・継続教育による研究成果活用の推進 院内看護研究指導を通しての研究成果活用の推進, 看護教育学研究(0917-6314) 18巻2号, 22-23, (2009.08).
- 37) 岡田綾: 院内看護研究の活かし方 看護研究・実践 成果報告の取り組みに期待すること 個人の成長と成長を育む職場づくり, ナーシング・トゥデイ (0912-2974) 24巻10号, 60-63, (2009.09).
- 38) 看護学教育に関する基準, 財団法人 大学基準協会資料 56号, 2002.

